

カトリック 仙台教区報

2011年1月2日 No.197
発行
カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
Tel (022) 222-7371 Fax (022) 222-7378
発行責任 広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>

主のご降誕と新年のお慶びを申し上げます。

司教年頭書簡

感謝と希望にあふれて、仙台教区年開催の年

司教 マルチノ 平賀 徹夫

仙台教区の皆様、明けましておめでとございます。新しい年、2011年を迎えました。すべての人の父である神の愛、神の御子・主イエス・キリストの恵み、そして、神の愛そのものである聖霊の祝福が皆様の上に豊かに注がれますように。

いよいよわたしたち仙台教区、し、皆で喜び祝う年としたいの民にとって特別な年、「仙台教区」です。

「開催の年となりました。この教区年開催のために準備したとき（1891年）から進め方が練られ、教区全体への

教区年ロゴマーク



函館から仙台に移されて教区名も仙台教区と改められたとき（1936年）から75年、この区切りの年にあたる今年、教区大会が開かれます。教区大会といっても大きな行事を一度だけ開催するという形ではなくて、今年の7月から来年の7月までの一年間を「仙台教区年！」とし、この一年を通して各小教区共同体においてはもちろん、各県でも、そして仙台教区4県全体でもお互いのつながり・交わりを深めるダイナミックな動きを起こしそれに参加する中で、「わたしたちはバラバラなのではない。一つの仙台教区という教会である」ことを確認

呼びかけもなされ、たくさんの方の反応も返ってきました。今、機運は大きく盛り上がってきています。

「仙台教区年！」は、仙台教区の司教座聖堂献堂の記念日であり保護の聖人である聖ペトロ・聖パウロ使徒の祭日に近い7月3日の主日に、仙台白百合

学園レジナパースホールで行われる開年行事をもって始まります。この一年をとおして仙台教区のわたしたちが、使徒言行録に記されている「信者たちは皆一つになって、民衆を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされた（2章44・47節）」という喜びの現実の一端を共に味わうことができたらいと願っています。

「仙台教区年！」のテーマは「感謝と希望」です。

感謝：函館教区設立から120年、仙台教区となつて75年ですが、その間もそれ以前からずっと、熱い思いに駆られた宣教師方の大きな働きがありました。またその信仰の真理を受けとめて信者となつた方々も、力を尽くしてそれを大切に守り伝えてくれました。そういう「いままで」を思うとき、今、仙台教区を受け継いで形作っているわたしたちは、先人たちへの感謝の念を抱かずにはいられません。この意味での感謝でもあります。またそれにもまして、計り知れない摂理のうちに歴史を導いておられ

生命の泉

▼今年のクリスマスキャロルやイルミネーションは、全く様変わりして派手な飾りも騒々しさもなくなった。子どもを囲んで楽しい家庭の祭りになればよいと思う▼ドイツZDFでNGO活動の様子が報道されていた。家族からはぐれてビルに入り口に腰掛けて寒さに凍える。気温はマイナス 度にもなる。せめて一晩だけでも暖かい所で温かいものを提供しようという活動は多い。バブルの一时的な好景気の後で家庭崩壊という深刻な社会問題が起こった。その後遺症はなお続いている。今や景気ばかりでなく社会的問題は世界的課題だが、個人としても出来ることを億劫がらずにしたい▼クリスマスから年末にかけて様々な慈善事業団体からの献金の依頼がたくさん来る。活動に携わる善意の人々に協力しなければという気持ちはあるが、私たちの身近なところへ援助を待っている人はいる。遠くの不幸に関心を向けて慈善のわざを行うことも大切だが、身近なところで果たさなければならぬ▼月8日の新聞投稿欄に「毎年この時期テレビやラジオで『子どもの頃はサンタクロースがいると信じていた』という言葉がイヤだ」とあった▼大人は見えないサンタクロースをしつかり演じなければならぬ。姿の見えない慈善のわざを家庭だけでなく社会の身近なところで行うことで、「よいものをもたらす」ように造られたという被造物のイメージが広がる。



キリストへのあこがれ

司教 マルチノ平賀徹夫

「キリスト教入門書はいくらでもあるが、それ以前の問題として、どのようにしたら信者でない人の心にキリストへのあこがれを引き起こすことができるかは誰も語らない」—これは、『福音宣教』誌の2010年11月号21ページにある、ジョルジュ・ネラン師（東京教区司祭）の「老宣教師の備忘録・後編」（前編は同10月号所載）という論文の文章です。宣教について論じているものですが、ハッとさせられました。「人の心にキリストへのあこがれを引き起こす」には「あなたに是非とも、イエス・キリストを知ってほしい」という熱い思いがこちら側にあることが必要でしょう。そしてそれには「キリストこそ自分の、また、どんな人であれその人の、心からのあこがれに答えを示してくださる方だ」という信仰を信者である自分が持っているかどうか問題となります。

昨年11月5日、東京の麹町教会で東京教区部落問題委員会が長い年月をかけて作成したDVD「絹の道の宣教・第一部」の試写会がありました。明治初期の関東での再宣教の時代、山上卓樹（やまかみたくじゅ）という人が解放をもたらすキリストの福音に出会って洗礼を受け、自らも伝道師としてパリ外国宣教会のテストウィド神父と共にキリストを伝える熱意に燃えて働いたので、福音の知らせは燎原の火のごとく広まった、ということが描かれていました。禁教と弾圧の時代が終わり、キリストを伝えることに命をかける宣教師と信者の働きがあったと同時にキリストの福音による解放の知らせを心から待ち望んでいた人々がいて、その両者の出会いがあって福音が“燎原の火のごとく”と形容されるように広まったわけです。

現代社会は、物や情報があふれにあふれ、それに埋もれて人の心がほとんど窒息しかかっているようです。そうであればあるほど、伝えずにはいられない福音を本当に持っているか、伝えたいという熱意はあるかということが信者であるこちら側への問いかけとして迫ってきます。一方、そのような社会だからこそ、人々は内からの渇きを感じ、自由とか解放とかを求めずにいられない状況にあるのだとも言えます。そのような人々に対して今、どのようにしてキリストへのあこがれを起こしてもらえるのでしょうか。どのようにしたらこの両者の出会いを実現させることができるのでしょうか。

主である神の限りない慈しみに対してささげ続ける感謝であります。希望……この感謝は希望につながります。仙台教区のそれほど長くはない歴史ですが、それでもいろいろな苦難・危機の時がありました。しかしそれをおして支え導いておられる神の愛をわたしたちは信じています。主の降誕祭で味わった言葉ですが、「すべ

ての人に救いをもたらす神の恵みが現れ（テトス2・11）」その恵みは「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束してくださっているからです。終わりに、今年の目標として『テサロニケの信徒への第一の手紙』1章16節から18節をいつも目の前に掲げたいと思います。教区年に当

たり、感謝と希望に裏打ちされているならば、それは無理で荒唐無稽な勧めの言葉ではないでしょう。次のようにあります。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。」

「教区年！」に向けて

「教区年！」準備委員会では、教区の皆さまに公募していた教区年ロゴマーク・教区年の祈り・教区年の歌についての検討を重ねた結果、以下の方々の作品を採用することに決定した。（敬称略）

【教区年ロゴマーク】

応募数 10点

採用・木下明（元寺小路教会）



【教区年の祈り】

応募数 10点

採用・横道和田（本町教会）

佐藤正一（元寺小路教会）

部芳春（白河教会）

【教区年の歌】

応募数 8点

採用・角田カトリック幼稚園

教職員・鎌田イサ子・関久子（四ツ家教会）

WYD2011 マドリード大会参加者募集

参加希望者はなるべく早くご連絡ください。
※参加定員は日本全体でAコース200人、Bコース100人ですが、この期間は、大学生の試験期間が終わるよう、参加者が早期に決まってしまう可能性があります。
【開催地】マドリード（スペイン）
【募集期間】年8月 日～年3月 日（締め切りが早まる可能性があります）
【日程】
AコースⅡ 年8月 7日（日）～8月 日（火）（7日間）
BコースⅡ 年8月 5日（月）～8月 日（水）（日間）

【参加資格】高校生を含まない以上5歳まで。
詳細は、カトリック中央協議会ホームページ内の、WYD2011マドリッド大会 日本事務局公式ページをご覧ください。

なお、教区内WYDの連絡は sendai75seinen@yahoo.co.jp まで。お急ぎの電話は、仙台中央地区（舟山）まで。カトリック元寺小路教会 TEL 022 (222) 5507



※参加者に対して仙台教区から、社会人5万円、学生 万円の援助が決定しました。
巡礼という貴重な経験をすることは、将来のために大きなプラスになると思います。是非、身近な青年に声をかけてください。

なお、祈り・歌については、専門的な有識者に内容の精査を依頼中であり、その結果を受けた後、正式に発表する予定である。

『積極的な協力がもたらす成長とは』 カトリック仙台教区研修会

教区宣教司牧評議会が中心となって企画した「仙台教区研修会」が、11月23日(火・勤労感謝の日)、岩手県四ツ家教会で、11月28日(日)青森県岩南地区研修会が八戸塩町教会でそれぞれ開催された。

【岩手県】

岩手県の「教区研修会」は11月23日、四ツ家教会を会場に109名(司教・司祭8名を含む)が参加して開催された。

①平賀司教の基調講話 ②昼食会 ③グループによる話し合い ④司教主司式のミサ、という内容であった。

司教講話では、イエスの新しい掟「私が愛したように互いに愛し合いなさい」に従い、司教、司祭、信徒はその位階秩序を超えて互いに尊敬し合い愛し合うこと、教会生活で信徒同士の交わりにつまずき、無力感に襲わ



れるような場合でもそれを乗り越える力を祈り求めながら共同体の中で歩むこと、なぜ自分が信者になったか、信仰によってどんな喜びがあるかを自信を持って人に伝えていくこと、千回転んでも千一回目の歩みを力強く踏み出すことなど、具体的例を示して説かれた。「成長」とは神と人々との交わりの中で一つ一つ育てていくものと呼びかけられた。

(四ツ家・菅野耕毅)

《参加者の声》

・司教様の講話は「成長をいろいろな切り口で示していただきました。私たちが喜び、感謝の気持ちを持ってそれを家族、教会、社会に伝えられればと思います。話し合いでは、自分のハンディキャップ、家族の介護、看取りを通して、自分の信仰を見出している状況など、様々な話が聞けて良かった。

(一関・久保田文吾)



のさりげない情報交換に、信者としての成長のヒントがあるように思われました。皆さん苦勞しながらも、懸命に教会の仕事に励んでいることに共感を覚えました。

(水沢・千田和子)

【青森県・岩南地区】

11月28日(日)八戸塩町教会で、青森県・岩南地区、教区研修会が開催された。大湊教会、十和田教会、三沢教会、

鮫町教会から120名ほどが参加した。

10時半から平賀司教の司式で主日のミサ、司教を囲んでの昼食。午後は司教講話、分団会、全体会があった。

講話では、「私たちは成長し続けている」と聖書の一節を紹介するとともに、「心からの笑顔」は隣人愛(ロマ13・9)に



よると説明され、「カトリック信者の義務と権利」については教会法の資料に基づいて話された。

分団会では、参加した50人が5班に分かれ各部屋に場所を移し、各班の司会のもとに進められた。私が参加した班では、宣教というテーマについて、自分がキリスト者になった時の感動を他の人に分けてあげられるよう、生きざまを見てもらう。

「毎回参加者の顔ぶれが同じ」については、若い信者にも教会内の役割を分担していただく。無理の無いことから始める。居心地の良い共同体を皆で作って行く等が話し合われた。

全体会では、各班の概要を書記の方が説明した。「共同体を運営していく経費について」をテーマにした班の発表は、各小教区の聖堂と共同体の維持についてでも皆で考える機会となった。

最後に司教から、「分団会では皆の前で話をする→聞いて



いただく→聞いてあげる→心を開くことが大切。子供に対する教育が大切。一人で信仰を生き抜いていくのではない」などの言葉をいただき、有意義な研修会となった。(十和田・佐々木誠)

《参加者の声》

司教様は基調講話において、2009年9月号の「カトリック生活」誌の記事と新教会法典第2集「神の民の教え」に関連させながら解説。大変参考になった。

「協力と成長」の関係がどう結びつくのかよくわからなかった。分ち合いのための分団会も自分にはあまり意味がない。宣教のために必要なことを研修したかった。(八戸塩町・蒔苗 実)

司教日程

1月2月

1・1①神の母聖マリア

2②主の公現

11③司祭評議会

16④教区研修会(郡山)

17⑤人権を考える委員会

18⑥あけの星会役員会

22⑦鶴ヶ谷墓地委員会新年会

24⑧25第6回修道会宣教会

31⑨教区司祭団月例会

2・3⑩学法院英智

8⑪聖ウルスラ学院英智

14⑫臨時司教総会

21⑬部キ連・行政責任者研修会

フォーラム

元寺小路教会からカンボジアへ 信徒宣教師派遣祝福式

王であるキリストの祭日である11月21日、元寺小路教会で、ミサ中、小松史朗神父により信徒宣教師として派遣される小野武（おの たけし）さんの派遣祝福式が行われた。

元寺小路教会所属の信徒である小野武さんは、今年66歳。昨年、定年退職を機に、自分の生き方をさらに深めるために、異文化交流をしてみたいと考えていた。そこに、目に入ったのは、「カトリック新聞」が海外での信徒宣教師を

募集している広告であった。

「これだ！」とひらめいた小野さんは、信徒宣教師の派遣主体である「日本カトリック信徒宣教師会（JLM）」が主催する

「体験発表会」に行き、実際に体験談を聞き、2010年度の信徒宣教師の募集に応じた。書類選考、面接による選考試験も無事



小野さんの派遣地はカンボジア。東ティモールに派遣される1人の女性を除いて、他の人の派遣地はみな、カンボジアであった。小野さんの出発は、いよいよ1月5日。まず、

パスし、4月から7ヶ月の研修を終え、小野さんを含む5人の信徒宣教師は、11月13日（土）、東京調布市のコングレガション・ド・ノートルダム調布修道院聖堂において、池長潤大阪大司教から、荘厳に派遣を受けた。

全ての歩みが神の計らい

聖ドミニコ女子修道会

鈴木 かな子 O.P



春風に吹かれ、兄弟姉妹で菜の花畑を駆けながら遊んだ日々を懐かしく思う郡山は私を生み、私を育てた信仰の故郷です。

当時、郡山教会の隣に無原罪聖母宣教会があり、同じ敷地に「マリア幼稚園」と児童養護施設「マリア園」がありました。私は「マリア幼稚園」に通いながら不思議に思ったのが、幼稚園と隣接する養護施設「マリア園」の子どもたちはいつも修道女と一緒に祈りし、日曜日のミサにも修道女と一緒にあずかっていたことです。私にとってはその姿がとても羨ましく、ど

招きにとたえて 32

うして子どもなのに修道女といつも一緒なの？ 私も一緒にいたい。ただそれだけの思いがいつも私の心の隅にありました。時が経ち、高校2年生の頃、私は今まで何でも素直に受け入れていたことに、ふと疑問を持ちました。「愛するってなんなの？」と考えれば考えるほど分

からなくなりました。いろんな方がいろんな答を私に与えてくれました。その時、私の心を震わせた答えは「空のコップに水を注ぐと、水はコップを満たし、コップから溢れ出る。自分自身の器も全く空にすると、そこに神様の思い、愛が注がれ、注がれた愛はコップを満たし、愛は

その器から溢れ出て、出会う人々に注がれる。これが愛すること。愛することはお互いに温かくなること！と、難しいことは何も分らないその時分、この答えが私の宝となり、その時、修道生活がどんなことなのか全く理解していなかった私なのですが、何故か修道生活の中でこの宝を生きてみたいと思いました。

その後、縁があつて23歳の春、聖ドミニコ女子修道会に入会する恵みを頂きました。

今は天国の父となりましたが、入会の日「我許をはなれゆく娘よ 今日よりは ひとつの道をひたすらゆけ」と、歌って送り出してくれた父に感謝し、全ての歩みが神の計らいと信じ、これからの歩みも神への信頼をもって歩んでいきたいと思っています。

半年間、現地の言葉であるクメール語の学習をし、その後、カンボジアの首都プノンペン市郊外にあるステンミンエンチャイ地区で活動が始める。具体的には、ゴミの山で資源になるものを拾い、生活している貧しい人びとと共に生活しながら、ゴミの山で働くおとなには衛生教育を、学校に行けない子どもたちに識字教育をする予定である。

ミサ後、小野さんが元寺小路教会共同体の人びとに一言と促されて、次のように抱負を述べた。

「今、感動、感謝でいっぱいです。47年間、会社中心の生活の後、JLMの門を叩きました。歴史文化、生活習慣が違ふカンボジアで信徒宣教師として働くことになりましたが、私が目標としていたことは、全ての人の生命が大切にされ、全ての人が幸福を感じる社会をめざし、喜びも悲しみもカンボジアの人びとと共に味わい、イエスと出会うていきたい、ということです。共同体全員から大きな拍手と花束を贈られ、今後の信徒宣教師としての活動に、祈りで共にいることを約束した。

平和を求める講演会に参加して

参加して

CWA仙台地区 中幡 容子

10月10日（日）、元寺小路教会の聖堂において東京潮見教会、小林祥二神父（写真）の「自衛隊や日米



安保がなくなっても、憲法9条を守るだけで国はまわれるか」の講演がありました。

小林師はCWA（カトリック労働者連盟）の協力者として全国の会員の信仰や活動を支えてくださる方です。

お話は敗戦から日本国憲法が出来るまでの歴史的背景から始まりました。

お話を聞いて特に感じた事は日本国憲法の9条や20条は有名ですが憲法の前文にこめられた理念、自国だけでなく全ての国の人々と、平和を願い共に平和に暮らすという思いが随所に見られる事です。小林師も力や暴力では国は守れない事はハッキリしているとおっしゃいました。前文を読み返してみると、その崇高な思いに感動します。世界に誇れる平和憲法ですね。

各教会、修道院等から約50名の参加があり熱心な質疑応答が交わされました。

今回の講演会はCWA仙台地区の企画に「仙台正平協」、「ピース9の会」、「夜明け（3グループ）」が賛同し共催してくださいました。講演会終了後、小林神父様を囲み、5グループの交流昼食会を開き、和気あいあいのひとときを持つ事ができました。皆さまのご協力に感謝します。

ホームレスは自己責任か？

ホームレスの人びとと人権シンポジウム

仙台市主催・夜回りグループの仙台協会企画・運営のシンポジウムが、2010年11月23日のびすく泉中央にて行われ150人ほどが参加した。基調講演は「基本的人権とホームレス生活者」を演題に川端純四郎氏（元東北学院大教員）写真から、ホームレスの人々を囲む日本の社会情勢の分析と、世界の動向が報告された。



ホームレスの人々の貧窮は、自己責任論で解決できるものではない。就職できない数多くの高校新卒者たち、無慈悲に解雇される非正規労働者たち、正社員であっても生活できないワーキングプア的大量発生などを生み出しながら、課税の累進法を含めて、大企業や高額所得者を優遇し、格差を激しくしている新自由主義政策こそが元凶であると、講師は指摘する。新自由主義とは、会社の経常利益の上昇に比例して、従業員給与が上らない、2003年以降の経済状況、政治的思潮のことだとい

以降の経済状況、政治的思潮のことだとい

その後、若い研究者たちによる仙台市内の路上生活者の状況や支援活動の報告、さらに会場からの質問を受けてのパネルディスカッションを行い、聴衆からも活発な発言があった。「人権」はホームレスの方々に限らず、私たち全ての問題であり、憲法で保障されている基本的人権、生存権、戦争放棄は深い連関があり、どれも奪われてはならないことを確認した。（畳屋丁・杵淵千鶴子）

ホームレス生活者を招いてクリスマスコンサート

ホームレス生活者の方々と共に、クリスマスを祝おうと、12月4日（土）元寺小路教会大聖堂でコンサートが行われた。

これは、'05年12月以来カトリック正義と平和仙台協議会（会長・渡辺清）が主催して行っているもので、今回で4回目になる。

当日来場したホームレス生活者は31名で、全員に、おにぎり、クッキー、チョコレート、アルファ米、奄美大島の黒糖などをプレゼントした。

コンサートの趣旨に賛同した2つの団体が無料出演した。「リコーダーアンサンブル・フーガ」はクラシックの曲目、「ピッコラ・マンドリーノ」は軽音楽を演奏。共に老人ホームやホスピスな

どで訪問演奏をしているが、教会の大聖堂で演奏するのは初めて

で、長年の夢だったと喜び、感謝された。



コンサートの最後は、両者の合同演奏「写真」で、入場者80名全員が聖歌

11番「しづけき」を合唱した。

カトリック正義と平和仙台協議会ではこの後、'02年1月から行っている恒例の「年末年始の炊き出し」の準備に入った。

炊き出しは、大晦日31日（金）12時から、宮城野区榴ヶ丘公園で年越しそば・うどんの炊き出し（NPO法人 萌友）、正月3日（月）12時から青葉区五橋公園でもちつきと5種類の餅を楽しんでいた。多くは、私たちが力を尽くしていくことが大切である」など、これからの活動目標となる示唆もいただいた。

あけの星会黙想会

カトリック仙塩地区連合婦人会（あけの星会）では、男性への参加も呼びかけている黙想会を11月16日（火）、元寺小路教会大聖堂を会場に開催し129名が参加した。

今年度のあけの星会の活動テーマ「現代社会の中での私たちの使命」について、仙台教区司教総代理の梅津明生師「写真」に講話をお願いした。

梅津師からは、「信仰は大事だが、忘れてはならないのが愛する心。神に愛されてきたことを振り返ってみることで、自分のことだけでなく他人にも目を向け、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣くような生き方が出来るように」とのお話をいただいた。日ごろの信仰生活を見直すよい機会となった。



また、孤独死を例に、「特に弱い立場の人々の中でイエスは私たちを待つておられる。一人ひとりに与えられて使命は異なるが、現代社会の中で、私たちがそのことに目を向けるように心がけ、人と人のつながりが持てるように、私たちの共同体が力を尽くしていくことが大切である」など、これからの活動目標となる示唆もいただいた。

講話の後、梅津師と共にミサをささげ、お話しいただいた内容をさらに深め、黙想会を終了した。今回の黙想会により、現代社会の中で、特に弱い立場の人々のために活動していかなければならないという意識を参加者全員が共有し、これからのあけの星会の活動に活かしていくことを改めて認識することが出来た。

（畳屋丁・佐藤栄美子）

各地から

福島県 いわき教会

米沢教会と北山原殉教地訪問

2010年10月20日(水)カトリックいわき教会の信者23名で米沢教会を訪問した。

米沢は昔、多くのキリシタンが殉教した史実がある地である。

朝7時半に集合、バスに乗って米沢教会に向かった。

米沢教会ではごミサに参加した後、米沢教会の主任司祭から米沢市にまつわるキリシタン殉教者のお話をお聞きした。



日本のキリシタン迫害時代に信仰を守るために命を捧げた「ペトロ岐部と187殉教者」が聖人に列せられたが、そのうち山形県米沢市の殉教者は53名、全国で最も多い。

米沢教会の皆さんとの懇親会の後、北山原キリシタン殉教地を訪れました。

北山原には大樹の下に石造りの十字架が立てられ、両側に聖母マリアと使徒ヨハネの像が立っていた。

十字架に磔にされたイエスを見つめる聖母マリアと聖ヨハネの姿は、心震えるものがある。

り、イエスの姿の中に信仰のために自らの命をささげた米沢の殉教者の姿と重ね合わせて見えた。

また、敷地内には無足町の甘粕右衛門宅で発見された、十字架の刻まれた石が置かれていた。

十字架の前で殉教者を追悼し、心を込めて祈りをささげた。

北山原殉教地を後にして、上杉伯爵亭では和やかな雰囲気の中で昼食、昼食の後にはNHKの大河ドラマ「天地人」の主人公直江兼

続のゆかりの地として有名な上杉神社を散策した。

米沢教会訪問の旅は、私たちの心に深く残る思い出の旅となった。(遠藤信乃)

宮城県 東仙台教会

ボーイスカウト・ガールスカウト40周年・30周年を迎えて

カトリック東仙台教会育成会のもとボーイスカウト仙台第37団・ガールスカウト宮城第4団の40周年並びにガールスカウト宮城第4団の30周年記念式典を仙台中央地区渡辺神父に出席いただき実施した。



例えば1970(昭和45)年発団当初はすべてが手探り状態、大変な時期を乗り越え、次代を担う青少年の健全育成に取り組んで来た。スカウトの卒団者も800人を越え一割近くが指導者として活躍して来た。活動拠点もカトリック東仙台教会敷地内で、素晴らしい自然環境と指導者の献身的な奉仕と熱意で今後益々の活動が期待される。(佐藤定雄)

第33回聖霊による刷新東北大会

(2010年10月22日・24日)

大会テーマ「聖霊みたまよ、私たちに燃え立たせてください」
今大会は仙台市においてウルバン神父(大阪府生野教会)を講師として開かれた。約60名

もったいない : MOTTAINAI



環境分野での功績によりノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさんは、「MOTTAINAI」を世界に広めようと活動しています。そのきっかけは、彼女が来日した折に、「もったいない」の言葉に出会い、大いに感動したからです。「もったいない」には、自然やものに対する敬意、愛などの意思が込められているとの説明に感銘を受け、これこそ環境問題を考えるにふさわしい精神をもつ言葉であり、どの国にもない表現であると確信したとのことです。

日本人が忘れかけた言葉である「もったいない」は、他の文化圏の人から大変に貴重な表現であるといわれて戸惑うかもしれません。しかし、この言葉は私たちにとって大事な財産です。この「もったいない」の精神は、食糧確保の手段を様々に工夫した長い縄文時代以来の生活の中でも培われてきたのでしょう。その伝統と精神を思い起こしながら「もったいない」を心に留めて生活し、「MOTTAINAI」を世界の人々に伝えるように努めませんか。

地球を大事にする会 猪岡 光



の参加者があった。初めに大会実行委員長のラシャペル神父から「聖なる者として成長するため、聖霊の実を祈り求めよう」との挨拶があった。2日目のミサ主司式をされた平賀司教はこの大会は皆が一つとなつて神様を讃えている。それは与えられた賜物を生かし、互いに仕え合い一つの体になつていくことである。それぞれの場で、さらに奉仕の働きに進んでいくよい原動力となる」と参加者を励まされた。ウルバン神父は北海道における聖霊刷新の礎を築かれたお一人で、その豊富な体

験や謙虚で温かなお人柄は聞く者を引き付けた。師は「福音は喜びの便りです。福音を伝えるためにはイエスとの出会いが必要です。世の光となるために、その光をイエスからもらいます。そのためには毎日聖書を読み、イエスと共に過ごすことによつて力が充電されます」と祈りの大切さを強調された。「分かち合い」や「証し」を通して、聖霊による体験が語られ、参加者は共に歩んでくださる神を賛美し、聖霊の息吹に燃え立たされた。(京野啓子)

仙台教区年！ 2011

⑤クリスマスの今昔

今年7月から始まる「仙台教区年！」に向けて、仙台教区の歩みを振り返って見よう。

今回は、75年前のクリスマスの様子を「炬火」から拾ってみた。

1936(昭和)年 月 発行の「炬火(たいまつ)」の巻頭にヴァンサン・ブリオット師が、「日本におけるクリスマスの意義」と題して当時のクリスマスの様子を次のように紹介している。

「多くの日本人が美しく飾られたクリスマス・ツリーや真っ赤な服を着たサンタクロースが子どもたちにプレゼントを配る。クリスマスは、信仰とは関係なく日本人にとって『全ての人にとっての楽しい日』となっている。友情と喜びを持って贈り物をやり取りする日である。日本人は、こうした西欧の習慣を喜んで取り入れる。しかし、その本質である全人類の救い主であるキリストの生誕を祝うということとはほとんど無関係である」と、現在においても、クリスマスのイルミネーション

ヨンや、プレゼント交換、など、街中がクリスマス一色で、75年前よりはるかに華やかになったが、本質はほとんど変わっていないと言えるのではないだろうか。

教区報 5号で1936(昭和)年当時、クリスマスに当たって、社会奉仕に励む信徒の活動を紹介した。次に現代の教会のクリスマス行事の一例を紹介します。

東仙台教会 クリスマス

「おめでとうクリスマス 神様とおめでとうクリスマス 教会で」の全員合唱で始まる東仙台教会恒例の、 月 日「共に祝

教会の写真を：伊藤龍也さん

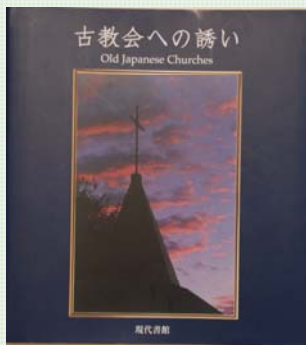
今、東北や北海道のカトリック教会・修道院などを写真に収めているカメラマンがいます。東京で歯科医を開業する伊藤龍也さんです。伊藤さんは仕事の合間を見ては休みを利用して写真を撮り歩いています。



ロックが趣味という伊藤さん、カメラを手にする姿もロックンローラーです。

教会を撮り始めたきっかけというのは、ある神父との世間話からだといえます。「長崎の写真集や資料集はたくさんあるのに東日本のものはないのですか？」「見たことないですね」。こんな会話がきっかけで撮影を始め、四千あまりのカットの中から生まれたのが『古教会への誘い』という写真集です。撮影のために関東周辺の26カ所のカトリック教会・修道院を訪ね回り、車の走行距離は一万キロ以上だったと言います。

伊藤さんはクリスチャンではないのですが、カトリック教会を撮り続けているうちに、この仕事が神様から与え



られた使命のように感じはじめているといえます。今現在は秋以降の出版に向け、東北や北海道の教会を撮り歩く日々が続いています。

皆さんの教会を訪れた際にはお茶を飲みながら撮影秘話でも聞かせていただくのも楽しいのではないのでしょうか。(熊谷雅也)



仙台教区誕生のころの教皇様は、第60代ピオXI世(Pius XI)です。

〈前回クイズの答え〉

クイズ 日本には16教区がありますが、各教区の面積を広い順に並べると、仙台教区は何番目でしょうか。



また会えてよかったね

「聖書を味わう」

今年は5回目です。この日の主役はいつも、心身に障がいを持つ方々。教会あげて、信者も信者でない人もお年寄りから幼児まで、みんなイエス様のご降誕を共に喜び、お祝いします。



新刊案内

『聖書を味わう』

著者 高橋重幸／発行オリエンス宗教研究所／定価1600円＋税
惜しまれつつ休刊になった雑誌「声」に掲載されていたものを、加筆修正し、このたび本書の形をとって誕生しました。

内容は三部に分かれており、第一部は「聖書を味わうために」、神の言葉を味わう秘訣として、「読書・黙想・祈り・観想」が挙げられ、その説明がなされています。聖書研究会をどのように行えばよいか、という具体的な例も示されています。

第二部は、「神と人間の交流」と題し、人間の基本的動作である「座る」「立つ」「歩く」を取り上げ、聖書が人間と神についてどう語っているかを解説しています。ユニークな視点での神と人間の関わりを述べているこの第二部は、聖書を味わう上で示唆に富むものです。

第三部は「神の民の賛美」。なぜ賛美をするのか、神の前に立つて賛美する者が神の民であることが述べられています。

トラピストの司祭であり聖書学者である著者の、み言葉への熱い思い、イエスへの深い愛が伝わってきます。